

動きを合わせることで思考を深めるリズムダンスの授業づくり

河野 吉信

1 はじめに

近年、子どもたちを取り巻く環境の変化から、運動に進んで取り組む子と運動に対して消極的な子という「運動の二極化」が進んでいる。多様性という点から言えば、運動が好きとか嫌いというのは、個人の意見に尊重されるべきことなのかもしれない。また、体育科の学習において、運動が「できる」、「できない」というのは、授業の中の子どもたちの姿として現れてしまうものである。どの子も運動を楽しみたい、できるようになりたいと思い、一生懸命に取り組むのだが、できないという状況のまま終わってしまう子どもも少なくはない。できる子にとっては楽しい、できない子にとっては楽しくないという感情を抱かせるような、授業の中での子どもの二極化で終わらせないためにも、教師はどの子にもできることを目指し授業の在り方を考えている。本校体育科部では、運動が「できる」と「わかる」という2つの柱を往還関係のようにつなげる授業実践を行ってきた。

2 リズムダンスで何を学ぶか

表現領域におけるリズムダンスは、以前から世の中での関心を集めていた。「小学校の表現領域で何を学ぶのか」というのはよく議論されるテーマである。それは実態として、運動会でのプログラムの1つとして、保護者に向けて見せるという目的のもと授業が構成されていることが多いからだと考える。その時に流行しているポップな曲に決まった振付を教えることでリズムダンスという学習が終えられているように思う。大西（2024）は、「ダンス教育のカリキュラムは資質・能力ベース（何ができるようになるか）としては未だに不明瞭でエビデンスが乏しく、内容ベース（何を学ばせるか）としては整理が不十分な、運動文化財の独自解釈に基づく種目ベース（何で学ばせるか）に留まっているようにみえる。」と述べている。このことから、学ばせるべき知識や技能の明確化といった点や、どのように系統的に学ぶのかといった点の整理が必要な領域であると考え。リズムダンスという授業を行うのであれば、子どもに何を教えるのか、どう子どもが学びとして受け取っていくかということを教師が明確に持っておく必要がある。学習指導要領解説の第3学年及び第4学年の目標として、知識及び技能では「リズムダンスでは、軽快なリズムに乗って全身で踊ること。」、

思考力、判断力、表現力等では、「自己の能力に適した課題を見付け、題材やリズムの特徴を捉えた踊り方や交流の仕方を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えること。」とある。リズムダンスという学習では、音楽のリズムを無視して自分が考える動きを自由に行えば良いというわけではなく、リズムの特徴から自分の動きを選んだり、構成を工夫したりすることで子どもの学びを確立することができる考える。このような点から、本単元では、ブレイキンを取り入れ、リズムダンスで学ぶことを整理しながら行う授業を目指した。

3 集団で動きを合わせる

本単元を行う以前に、マット運動「動きを合わせよう」の授業を行った。そこで学んだ技などの学習内容や、子どもたちと共有した手立てについても本単元で取り扱った。本単元では、音楽的用語である「リズム」と「テンポ」という言葉を用いながら、ペアや集団で「動きを合わせる」ことを目指した。本単元で言うリズムとは、例えば音楽の授業で、手拍子を「タンタンタン」というリズムでたたくことを学習する際の「タン」という言葉のことを意味して子どもたちと共有を行った。この「動きのリズム」を、吉田・三木（2005）は、「他の領域でいわれるリズムと区別されているもので、運動を実施するときの力動感としての抑揚や起伏で表される緊張や解緊張を表したリズムのこと」と述べている。例えば、ボール投げを行う場面で、ステップを入れて遠くに投げることを指導する際には、「右足を着いて、左足に体重をいれて、再度右足に入れ替えて～」と動きを言葉で説明することと併せて、「タン・タ・ターン」とリズムを加えて説明することがある。このような動きのリズムは人の感じ方それぞれで違い、力の入れ具合や、次の動きの予測などにより変化をすると考えられる。これらを器械運動の動きで表すと、前転の動きを表す言葉がリズム「クルーンキュッ」（運動主体者の感覚に基づくリズム）、その動きをどの速さで行うかをテンポ（動きのポイントに迫るようなスピード）とした。このリズムとテンポを子供たちが考えながら集団で動きを合わせていき、単元最終では、曲のリズムにも合わせていけるようにすることを目指した。これまで子どもたちは、器械運動の集団マットでの学習の際、動きのリズムを用いながら、友達と動きを合わせることで得られる達成感や喜びを味わってきた。また、技ができなかった子も動きのリズムを通して、技ができるようになったということもあった。今回はリズムダンスにおいて、ブレイキンの技を扱い、友達と動きを合わせることで、曲調に合った動きができることを目指していきたいと考えた。また、表現領域では、どうしても子どもの「はずかしい」という気持ちが出ることもある。ペアやグループで動きを合わせることで、表現領域の授業で生じやすい子どもの「はずかしさ」についても軽減できると考えた。

4 授業の実際

(1) ブレイキンとは

ブレイキンとは、1970年代にアメリカのニューヨークの若者たちによって流行したダンスのスタイル（踊り方）である。2024年に行われたパリ五輪では、正式種目となったことが記憶に新しい。このブレイキンと呼ばれるスタイル（踊り方）は、ステップを踏む「エントリー」、床の上で足を素早く動かす「フロアムーブ」、ウインドミルやヘッドスピンなどの「パワームーブ」、チェアーやジョーダンなどの「フリーズ」という技の分類で構成される。オリンピックでは、これらは動きのダイナミックさや、音楽の特徴にどれだけ合っていたか（音にはめる）などで評価がされていた。主にバトルと呼ばれる1対1の対戦方式で行われ、ジャッジと呼ばれる審判の決定で勝敗が決まっていた。今回は、子どもたちの学ぶべき内容の整理という点から、バトルではなく、ブレイキンの動きを表現することを軸として、リズムダンスの授業を構成した。

本単元は、器械運動のマット運動で単一技や連続技についての学習を経た後に行ったということもあり、子ども達の中には、前転や側転を取り入れるといった様子も見られた。このようなマット運動の技についても取り入れて良いことを子どもたちと共有し授業を行った。マット運動の技が回転技やバランス技と分類されるように、ブレイキンの技について、必要な要素や力を図1のように分類した。エントリー、フロアムーブ、パワームーブ、フリーズの動きに共通して必要なのは、リズムをキープすることである。エントリーでは、リズムにのって簡単なステップを踏みながら、フロアムーブやパワームーブへ移行していく。フロアムーブやフ

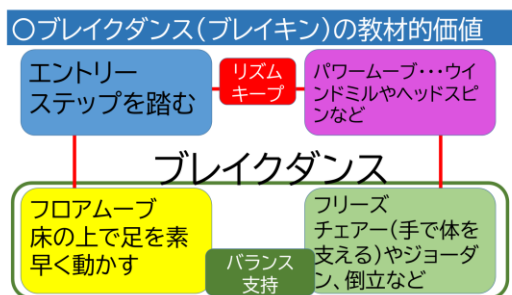


図1 ブレイキンの教材的価値

リーズについては、体を支持しながら足を入れ替えたり、バランスを保ってフリーズ（動きの制止）させたりする要素が必要となってくる。動きを止めずに、なめらかに技を連続させることは、マット運動の連続技でも大切なこととして伝えてきた。リズムダンスでもそれぞれの動きをリズムキープしながら動くことを目指して行った。

(2) 単元計画と授業について

本単元では、子どもたちの発達段階や実態なども踏まえて、以下のような単元計画を設定した。

第1次	第1時	オリエンテーション ブレイキンを知り，体を使っておどろう。
	第2時	ブレイキンの技をためしてみよう。
	第3時	ブレイキンの技をよりよくしよう。
第2次	第4時	ブレイキンの技で，ペアの友達と動きを考えよう。
	第5時	ブレイキンの技で，ペアの友達と動きを合わせよう。
第3次	第6時	ブレイキンの技で，グループの友達と動きを考えよう。
	第7時	ブレイキンの技で，グループの友達と動きを合わせよう。
	第8時	曲の特徴を捉えながら，ブレイキンの技で動きを合わせよう。
	第9時	曲の特徴を捉えながら，ブレイキンの技で動きを合わせよう。
第4次	第10時	ブレイキンの発表会をしよう。

単元計画には入らないが，第0次として，総合的な学習の時間に，オリンピックとパラリンピックについて子どもたちは学んだ。オリンピックには，どのような目的があるのか，どのような種目があるのか，思い思いに追求したいことを学んでいった。その中で，今回のパリ大会から種目として扱われたブレイキンに子どもたちの関心が集められた。Shigekix 選手（半井重幸選手）や，AMI 選手（湯浅亜実選手）の実際のパリ大会で活躍する姿を目の当たりにした子供たちからは，「やってみたい！」という意見が上がっていた。

第1時では，オリエンテーションとして，総合学習とは別に，ブレイキンとはどのような動きかを，見るだけではなく「やってみる」という意識で動画視聴を行い，興味を深めた。「難しそう」という声が上がったが，選手が動いているところを一時停止して見てみると，「この動きはできそう」と，実際にやってみようとする子も出てきた。

第2時，第3時では，ブレイキンの技について，エントリーやフロアムーブ，フリーズの基本的な技を必要な知識として教えた。基本の形を教えるに留めて，そこから動きを工夫してもよいことを伝えた。子どもたち同



図2 基本的な技や動きの説明

士で動きを見合ったり、アドバイスを言ったりしながら高め合うといった姿が見られた。フリーズを学ぶ時間では、「よりかっこよくするためにはどうすればいい？」と子どもたちに問うと、「肩倒立で単に足を伸ばすだけではなく、あえて膝を交差してみる」ことや、「三点倒立は膝を曲げてみる」など、様々な工夫を子どもたちは考え創造していった。一つ一つの技をより大きく行ったり、より丁寧に行ったりして、技ができるようになりつつあった。

第4時では、一つ一つの技の練習から、一連の流れ（フレーズ）がある演技ができるようにペアで動きを考えた。一連の流れの知識として、 $8 \times 2 + 1$ のリズム（17拍）で「エントリー」→「フロアムーブ」→「フリーズ」という流れで行うことを提示した。エントリーで何を行うか、トップロックやアップロック、スキップなどの技の中からどの動きを選択し、どのカウントまでを行うのかを子どもたちはペアで創造した。ペアで動きを考えることで、なりたい姿を友達同士で共有しながら、「この足をここにもってきて～」というような動きの修正に迫るようなアドバイスをお互いに行うことができるようになった。

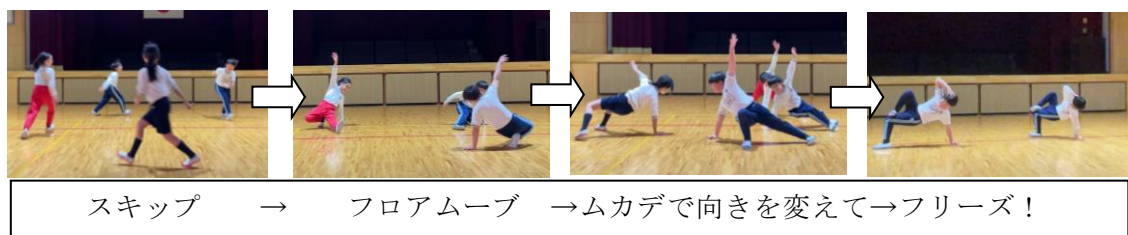
第5時では、一連の流れのつながりに着目して動きを合わせることを目指した。一つ一つの技がなめらかにつながることを目標に動きの精度を上げていった。「トップロックの最後はしゃがむから、次はフロアムーブの6歩に入ろう」というように、技を選択についても、次の動きを考えたものに修正をしていった。技の流れが大体決まると、「まほうの言葉（リズム）」を考えた。すぐに音楽に合わせるのではなく、ペアでリズムを合わせることで、自分の体に動きを定着化させ、友達と動きが合うことを目指した。

第6時、第7時から、グループ（4人）で一連の流れ（フレーズ）の動きを考えた。このフレーズは、 $8 \times 4 + 1$ のリズム（33拍）で、グループの4人で動きを考える活動を行った。動きの計画書をつくり、一連の動きと、「まほうの言葉」をグループで考えた。グループで行うことで、ペアの時よりもダイナミックな表現、構成の工夫をする子も出てきた。見せ方の工夫として、「①見ている人の視線をずらす」「②大きい動きから小さい動きの変化」を子どもたちと共有した。

第8時、第9時は、第101回研究発表協議会の中で、授業を行った。曲をよく聞いて、音の強弱や、音の種類などの特徴を捉えて、33拍の中の特徴があるカウントでどのような動きをするかを考えた。33拍目のところで、「グワーン（子どもたちと共有）」という音があり、そこでフリーズやポーズをすると曲の特徴に合っていることを多くの子どもが見つけていた。曲の特徴に合っているかどうかをグループで意見を伝え合い、動きを修正する姿が見られた。

第10時は、保護者の参観授業に設定し、保護者の前で、発表会を行った。体育館の一部を特別ステージと見立て、スポットライトを当て、みんなが輝ける空間で踊る

ことができた。子どもたちも意気込んで臨むことができたように感じる。また、人前で踊ることに対しては臆かしさを感じる子は少なく、どの子も堂々と踊ることができた。



5 成果と考察

本単元では、ブレイキンを通して基本的な技や動きを、まずは知識として教えたことで、子どもたちが曲のリズムに合わせながら、自信をもって踊ることができた。マット運動とブレイキンの技には共通点もあり、系統的に学習することに可能性がある教材だと感じた。また、発表会での友達の踊りを見た子どもからは、「33のカウントのところでフリーズをして、みんながピタッと合っていたのすごいなと思った」と伝えている子がいた。友達の演技を見た子どもが曲の特徴に「合う」、「合わない」といったことを判断できる力が備わったと考える。

6 まとめ

リズムダンスの授業の中では、音楽に合わせて踊ることに恥ずかしさという感情を抱き、ダンスというものに消極的になってしまう子もいる。今回は、ダンスの動きを知識として教え、子どもの中に知識の定着を図り、曲のリズムに合わせてその知識（動き）を集団で合わせながら踊ることで、多くの子が意欲的に学習に取り組むことができていた。きちんと知識として子どもに動きを与えることで、自らの身体表現を恥ずかしいと思う感情は薄れていくと考える。しかし、これは発達段階によって変わってくるのかもしれない。今後も、このブレイキンという教材を取り扱いながら、他の学年での研究も進めて行きたいと考える。

（参考引用文献）

- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説 体育編」株式会社東洋館，2018年
- ・大西祐司「体育科教育 2024年3月1日発行」大修館書店，2024年，p.16
- ・吉田茂・三木四郎「教師のための運動学」大修館書店，1996年